

白然居士



うやうにん老ハ东山や府寺落
あつこ小住居仕老うそふ爰子
白老居士と申唱合乃以坐いり
二七日悦法を御宣ふと目能取
うそ座る皆い案う所やトへ
雲石も造笑のれり建うへが子
うそ府寺はまふあも落

願くまめ日悦法一坐方増也

寄所高座にあのやがたのうゝ

下カ儿

うながしづゝく歌白一代

後主勅在元元寶号二世の徳佛

十乃薩摩

為神方に眞心經や、禪を

詞

親誦を法安し
久是

ツカレ

うきうき小袖少々点々

以觀彌文在詩
雅苑

一
詩

うゝ心願乃ちとて二寶衆僧の

御布記一巻
右之紙
凡八二

歌壇靈妙傑作の爲に代り

下力儿

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

西天の貧女が一夜を惜みず

きーろガ子後乃世の運善々魂
賀女いおや遠くあ方乃代衣
うーめーきーく浮世中然も
出へ先き先姑諸々に何一巻日
はとむと後あふ好ふ日お辰五
墨染乃袖を濡すは数乃お前も
以故く養袖をぬすてぬ人を

一、二、三、
詩

あーくーやうにふも遠く
東國うーい遠人商人もふいば度
お小と呈阿また人を買取了候
ふ十四五計成女代買方ふり
お月がみる眼をこう了い程子
屋更てふりこーいんふり
あふ波更いりおわのおをなふ

も能く親の遺言こやせし申す
ふひを親をといふ説法の坐敷に
あゝぬひる世なるも能く土魂
雲居寺に座る程に大なる
みうひるまゝい 然るへうん
い飛ハゝうゝ種にんがふ急
はさる御へん 屋敷下ひる

やうゝあふう やうゝあは
はさるゆき 何るゝゆう
いんゝたゝゝ親誦をあきうい
女代あゝけなゝ男の来王んて
遊立るいゝ程に屋敷よりたと
しへんやうゝあふうい程小
屋にあらあゝぬもなりやんぬ

ふわは女を横きくふふふふ
其上親補を阿々いふも喉小袖
たういふ方の代衣とくひふ
ふわちと不器にふ——着たり
旅量仕ふきば老い親乃述善
くふふふ力を此小袖よ加ふ
親補ふあふふふと思ひふぬい

喉々能老い人商人ふふふ
グ神をたねびふふ備ふふ
あふふば力乃ふふめたるふむ
ふふふあふふふ——ひと商人
なふふふ東國うふふふふ
大は松本へ乗る遊ふふふふ
ひるふふふ——遊人ば出いふふ

あそを成ふまゝ居たは小袖を
持つ行女子ヲカシ稽了は違ふぬ
ゆるまゝ山 山やう就る今日
まゝ表は説法、無りなわ依
有ニテいやく説法は百日守日
きこゝめさずも善惡の二を
まゝかゝる人ぞうめど子女を善人

商人に悪人善惡の二を善惡に
きこゝめしたる人ぞうめど子女を
説法は違ふまゝなわ依りて
不な歌一切お小興宿生皆我成
佛さ終り乃うあなも片上か
控人をたひく有ニテいふ出
うこももいさやさうな欠表は

事ことさううな

ヨメ方櫓こはうろろろろ

ふもも濃のあるるここびびととううろろろろ心こぬ

かかいいききななふふに

水濤うろろろろろろろろろろ

ふふいいええととははーーののひひええいいろろいい

一一ちちかかニニーーかかななんんととーーいい色しちち

とと漕こううすす家かみみななももははびびとといい

みみととはは佃てん子こりりハハろろろろ西せい白はくとと

ののくくろろううわわ板いたとと何なに乃の因いん和わ境けい

是こゝろハハ白はく能のう灰はい土どとと中ちゆう説せつ理り者しやとと

張ちやうのの説せつ法ぽう乃の場ばうととももとと中ちゆう和わ境けい

中ちゆうとと来らい里りたたわわ説せつ法ぽうろろろろ

乃のう理りをを宣せん終しゆうとと我われ小せう日じつ佃てん子こななふふ

もも能のう哉やにに佃てん子ことと中ちゆうととははちちうう

免めんにに角かく小せう卒そつのの小せう袖しゆうハハちちううろろろろ

は老を好む人小袖を召被る

と見たりやもふまゝ早 衆とせ

たう見るとも爰小咲小りい

何よりそより早 さんおお

なり小大法のふづ被をひよは

中に人を買ははる二度をさぬ

はふりい被よえ集るせらり

ふおるんがたき被る中ふも

望き大法のい加換小力を被り

がは老よりあづたすけえは

二度着衣へり趣ぬ法よりい

被よりい乃法をも居しかり

まゝみぬこの法をも被り被

中ふり所詮は老と被り了奥

む所乃國海舟をいふ家とある
しるきおとまりとある 船とわ

海舟をいふは拷問をいふとある

拷問とあるは松方とある

心のちをいふは心のちを

いふは心のちをいふは心のちを

いふは心のちをいふは心のちを

いふは心のちをいふは心のちを

いふは心のちをいふは心のちを

いふは心のちをいふは心のちを

いふは心のちをいふは心のちを

いふは心のちをいふは心のちを

いふは心のちをいふは心のちを

いふは心のちをいふは心のちを

上皇人小夏のひつりお宿と
申候程老をうへとまをこたる
なんちゅうひり一太ふとてん
程は加へなふて是川ひは
まー^いま神もまやうにあら
まなうだういせに無きふ
程はづぬくになはる可候

の趣こつひるまは^早む能
趣うん^早なまゝゑみわ
はあうわん^いあゝお頭殿乃
清部乃色ちうあ我けうん
^いやゝちはともなをまいま
み先なる人春うそ神も冬がな
りゝん邦へ上皇うちり日能

居士能蘇のるを遂に及らん一
まづ清く物あはれとす所人
思ふ日能居士は蘇すふら
ちと能なくはう能御傳
少くも一年今卷もく説法
は宣ふひともむづろ能乃能
覺らん能言座の上とく一
一

居士能蘇一ちと奥にも其ゆえ
福一とくは下ひらんあふ
う能能云能語とくはあふ
能換のりもる能一蘇を蘇らん
此者を能くへ先は蘇能ん
其例乃一きふは能下りせ
ゆん一是に能なり能ん是を

めーて御業久

二詩

能くも徳を

案じらふは此老を致しる

いりむいしやだくみさばうを

あら居さをさくすあふはう

所をあくうしん所あまを母

うれりしき所ま

二詩 川や河乃

しきなるうんつき

二詩

志賀幸崎の

上地 一松

しきなるうんつき

林のしきなるうんつき

しきなるうんつき

をこけしきなるうんつき

しきなるうんつき

しきなるうんつき

しきなるうんつき

海をへてそとぞあつてあやうも
 かりに黄帝乃て下小
 貨独以て海を奔走ありあはれ
 貨独在上の池乃て面を見渡さば
 折有蛇乃て示るるに寒を告ぐ
 柳の一葉水に浮りてみれば
 虫是も虚言日暮きあり

一、葉子、上小京つゝ淡中くくに
そとりふ、衣心、きりぬ、くも板乃
茶をびく、風日さまり、けげ日
うらうら秋暮、むぎくふ、然乃、揺藻
うはな、まじおしひろめ——うわ
たぐ、刀々、舟を、化我、わ、黄帝是に
めで、飛て、島江を、く、あ、わ、つ、わ、富

出心をやひく之ほ
おそ免事一萬八千
志しれん船の船乃
ひくすもまた天子
御船を就船と名付
一葉とす事すなは
りもうわぶ君の決
代を

早詞

鶴みとりも此代
いふやいぞ神り
鶴みとけりひる
さうもか子にさ
清き路らん
らんおわし
候もぬふ

佛乃旅行者なり——竹ひも
一切宿をさしきんぬる——
居士もあしそちもあし方をは
ふふふあふもは老成助ふ
ふあふあふら表をくるを
たけぬる小東山よあふに僧の
扇乃とに本徳業のかきまを

持ふ数珠もきききき
あひふふふふふ事
り——あふたふあふたふ
あふあふらひふあふハ乃
数珠きききの竹は扇乃は祇
なつとあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ

[illegible][illegible]

[illegible]

